

風土と言葉 谷岡亜紀

本田一弘歌集『あらがね』が日本歌人クラブ賞を受賞した。「あらがね」とは土から掘り出したばかりの金属であり、また鉄の別名でもあるが、「あらがねの」と枕詞として使われる場合「土」に掛かる。作者はそれを意識しているだろう。実際歌集には「土」の歌が大変多い。

・春はこの積もれる雪の下にあらむ土のしづかな息つきおもふ
 ・みちのくのしのぶもぢづり誰ゆゑにわが産土を捨てねばならぬ
 ・校庭に埋めたるつちを掘り起こし大き土囊に詰むなつやすみ
 ・福島の土うたふべし生きてわれは死んでもわれは土をとぶらふ
 ・吾妻嶺と磐梯山と安達太良と酒酌み交はず年のはじめに
 土とは、万物の命を育んできた「土地」であり、「風土」であり「産土」である。最後の「吾妻嶺と」の歌には「土」という言葉は出ていないが、まぎれもなく「風土」「産土」への賛歌である。

しかもその命の土はいま、一方では「汚染土」として祀り捨てられている。その傷ついた土への祈りが、この歌集であると言える。もう一つ、歌集の中心テーマをなすのは「声」「言葉」である。

・てのひらの雪消ゆるがに忘れてゆく福島の人のこゑこゑ
 ・帰還困難区域の野辺をさ走れるみのししのなくこゑをきかずや
 ・田ん坊の語ることはを訴ふべし磐梯山のまなざしのこと
 ・おおははのことばといはむ磐梯のそびらにやはくしろき雪ふる

・うぶすなの言葉のしづく栖葉町木戸川の瀬にもどる蛙のよ
 ・福島に生まれしわれはあらがねの土の産んだる言葉を勸ふ
 最後の歌で、作者は思いを端的に述べている。福島に「生まれた」ことを恩寵とし、あるいは運命として、風土の産み落とす命の言葉を掘り下げ、耕してゆく。その志が、本田にとつての歌であろう。

もう一冊、「風土」を歌って印象的な歌集が出された。玉井清弘の第九歌集『谿泉』である。玉井は、四国高松に根差して歌う。
 ・みなぎれる力の満つる大地より大根抜けばはつしと鳴りぬ
 ・燃えながら南無阿弥陀仏唱える声のこだます今日を来たれば
 ・不善をぞなしいる衆生のひとりなりひとしくわれに朝日のとどく
 ・流し樽流れいし世のゆたかなり瀬戸内海に雪降りしきる
 ・紅葉する曼荼羅の野にひとすじの夕陽届けば行きどころなし
 ・閏年逆打ち遍路多きなまじり讃岐を空海のゆく
 四国と言えば遍路。作者は現在三回の歩き遍路を終え、四度目を歩き始めたという。歌集にはおのずと仏教的な手触りが添う。しかもそのフォークロアには、一つ突き抜けたユーモアが宿る。

・葉桜をくぐりて松山天狗来よ握手をなさは愉しからまし
 ・色街のかつての細き道ゆくにおにいさんちよっとの呼び声あらず
 ・いくたびも眼鏡ぬぐえどなお見えず何の遊びに生まれしこの世
 ・山上の池の面に時止まり一炊の夢さめたるごとし
 ・雷鳴は稲のみのりをことほぎてながく大空にとどろきやまず
 風土やそこでの死者の声を謙虚に聞き、そしてそれを言葉にしてゆく。その「祈りとしての歌」のありようを思う。「伝えるという仕事の役割は、声を上げられずにいる人々の痛みを置き去りにしないことだ」。フォトジャーナリスト・安田菜津紀の言葉である。